



社長のひとりごと…

当誌『わいわいくらぶ』は、当社大切なお客様のために、わたしたち藤本工務店のスタッフがお伝えさせていただきますコミュニティー誌です。

『薄暗い中で・・・』



ここは、岐阜県山県市。人口29,000人ほどの、小さな町である。中心部にショッピングセンターの平和堂があるものの、見渡すかぎり山々が近くに迫っている。主な地場産業として水道の水栓金具メーカーがあるが、なんと全国の80%のシェアがあるそうで驚いた。また、その他の産業としては林業が有名である。

今日の目的はその林業で、以前から知人に、「一度木材を見においでよ」と誘われていて、それがようやく実現したのだ。町の中心部を流れる板取川に沿い、上流に向かって車を走らせるが、深い山肌の至る所に小さな集落がポツリポツリと点在する。この地域は、以前製材所が80ヶ所もあったそうだが、林業の衰退により現在では半数以下になっているそうだ。それでも敦賀市で製材所が2、3ヶ所しか無いことを思えば大変な数である。また、そのほとんどが家族経営で、何もない山道のちょっとした広場に工場が点在している。そこで働く人達は、薄暗い工場の中、けたたましい製材機の音で、会話もままならない状態で黙々と作業をされている。



木材の製材では乾燥の工程が非常に重要で、基本は天日による自然乾燥である。一枚一枚を手作業で並べて乾燥させる地道な作業で、出荷までには3ヶ月の期間を要する。

私が大工修行をしていた頃は、木材の善し悪しを見抜く技術が要求された。使い方を間違えれば建物に支障がでるからである。そこで、木の性質を見て使う場所へ振り分ける。この木は良い木、この木は悪い木という風に・・・。

しかし、全く恥ずかしながら大工歴38年にして、その選別の仕方（考え方）が根本的に間違っていた事を思い知らされた。ここに製材されてある材木は、どれをとっても多くの人達の地道な手作業で成り立っている。つまり、根本的に「良い木」も「悪い木」も無いのである。そこにあるのは、全て職人の手作業により造られた「本物の木」だけであった。

当社は本物の木をふんだんに使う家造りを提案している。だからこそ、薄暗い製材所の中で目を輝かせ熱く語ってくれた人達の思いを胸に、適材適所で材木を生かしきるべきである。また、そんな造り手一人一人の想いが、安心して安らぎのある家造りにつながると私は信じている。

ではまた、来月もお会いしましょう。
今回も最後まで読んでいただき……、

あーッ ございまして!!

